考古学財団

公益財団法人かながわ考古学財団　令和2年度考古学特別研究講座
ー報告書の成果から導き出されるものー

古墳時代のムラの鏡

ー住居の鏡・水辺の鏡ー

令和2年10月10日[土] 13:00～16:00 [開場12:30]

神奈川県埋蔵文化財センター　3階研修室

趣旨説明　岸本泰緒子　「古墳時代のムラの鏡」
事例報告1　戸羽　康一　「戸田小柳遺跡」
事例報告2　相良　英樹　「倉見川端遺跡」

文化庁
地域の特色ある
埋蔵文化財活用事業

ごあいさつ

公益財団法人かながわ考古学財団は、文化財保護法の趣旨が生かされるよう、神奈川県内の発掘調査を行うとともに、その調査成果を広く公開し県民の皆様が活用できるようにすることにより、学術・文化の振興と地域文化の発展に寄与することを目的として活動しています。

この考古学特別研究講座では、これまで当財団が発掘調査を行った県内各地の遺跡について、その調査結果をまとめた発掘調査報告書の成果から導きだされた地域の歴史像を研究し、提示いたします。新たな問題提起をすることにより、埋蔵文化財に対する興味・関心と理解をより深めていただくことを目的とするもので、今回で８回目の開催となります。

今回のテーマは「古墳時代のムラの鏡」です。古墳時代の集落関連遺構から出土した鏡について、どのような行為の結果、そこから出土したのか、事例や銅鏡の性質などの方面から検討をおこないます。もちろん、今回の講座だけでは到底語りつくせませんが、皆さまのご高評を仰ぎながら、この考古学特別研究講座を更に深化させてまいりたいと思いますので、ご支援の程をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、当財団の事業に関して日頃よりご指導、ご協力を賜っている関係諸機関・諸氏ならびにご活用、ご支援をいただいている県民の皆さまに、お礼を申し上げます。

2020(令和 2) 年 10 月

公益財団法人かながわ考古学財団
理事長　　近　藤　晶　一

趣旨説明

古墳時代のムラの鏡

公益財団法人かながわ考古学財団　岸本泰緒子

はじめに

古墳時代の鏡には古墳出土、つまり副葬品の鏡と、そうではない鏡（非副葬鏡）とがあります。副葬品としての鏡については、三角縁神獣鏡をはじめとして数多くの研究があり、政権との関わりから語られることも多い、古墳時代研究の花形ともいえる存在です。しかし神奈川や東京では、後者の非副葬鏡が多くみられます。非副葬鏡は大別すると住居あるいは水辺からの出土例がありますが、これらは単なる廃棄ではなく、儀礼の結果であったり、神への奉納であったりするのではないか、と考えられています（新井 2018）。

当財団のこれまでの調査で出土した神奈川県内の鏡には、①厚木市戸田小柳遺跡出土双頭龍文鏡、②小田原市高田南原遺跡出土珠文鏡、③寒川町倉見川端遺跡出土珠文鏡の３面があります。しかし残念ながらこれら３面については、出土状況から得られる情報が少なく、それぞれ単独では用途の解釈が難しいものでした。そこで今回の講座では、そもそも鏡は当時どのような力や効果を期待されていたのか、県内外の類似する事例ではどのような使われ方が想定されているのか、といった視点を追加して、これらの鏡がどのように使用され、なぜそこに残されたのかについて、改めて考えてみたいと思います。

1. 鏡が持つ力・期待されていた力

銅鏡のはじまり　東アジア最初の金属製の鏡は、約 4000 年前、中国新疆や青海地方の新石器時代斉家文化の中で確認されています。銅鏡は通常青銅（銅＋錫）で作られますが、登場直後の銅鏡は銅成分が多く、青銅というより純銅に近いものでした。また鏡面のつくりが薄いことから、姿見としての機能よりも、太陽光を反射してスパンコールのようにキラキラと光り輝く性質の方が重要であったと考えられています。また出現期の鏡の文様には、放射状の線文や星形の文様、連弧文など光を表すとされる文様があることから、鏡自体が太陽の雛形だと認識されていたとも考えられています [図 1]。

中国での銅鏡　登場当初は装身具、祭器としての趣が強い銅鏡でしたが、姿見としての機能はいつから重要視されたのでしょうか。中国では銅鏡より先行して、「鑑」という名前の青銅製容器が存在しており、水を張り姿見として使用したとされています。登場後しばらくは祭器として細々と作られていた鏡ですが、戦国時代後期（紀元前３世紀頃）になると突然普及が進みます。それは冠位制度が整備され、官人が身だしなみを整える必要が生じたからだといわれています 。男女を問わず使用され、生前の愛用の品のひとつとして、多くの場合は１人１面を墓に副葬しました。また、魔除けのための小型鏡を遺体の胸や頭の近くに置く場合もありました。

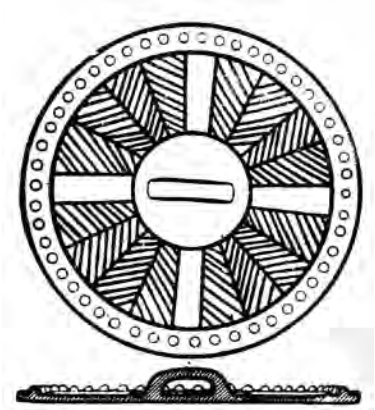


図１　出現期の銅鏡（河南安陽市殷墟婦好墓出土 786）

銅鏡の拡がり　前漢武帝の時期（紀元前 141-87 年）、中国周縁地域に銅鏡とその使用が拡がりました。武帝期は漢の版図が最大となった時期であり、領土拡大に意欲的だった武帝の侵略範囲と連動するように、銅鏡

の出土範囲も、南越国（中国南部～ベトナム北部）、西北から中央アジア、モンゴル、シベリア、朝鮮半島に拡がり、日本列島にも銅鏡が流入したのです。漢が領土とした地域、またその外側から朝貢に来る地域に、中国製の鏡やその摸倣鏡が残されています。それらの地域のなかで、日本での鏡の取り扱い方は実に独特です。キラキラぴかぴかした鏡をよほど気に入ったのか、朝貢に行ってもらってくるのはもちろん、個人輸入も盛んに行われたようで、短期間に大量の鏡が持ち込まれました。

日本に流入した銅鏡　日本列島に銅鏡が持ち込まれたのは、弥生時代のことです。弥生時代前期に北東アジアの多鈕鏡、弥生時代中期に中国鏡が入ってきました。その後も中国鏡は輸入され続け、日本列島でも独自に製作し、多量の鏡を使用していました。武帝期以来、ユーラシア大陸各地で中国鏡に端を発する銅鏡が輸入、模倣製作されましたが、それらはいずれも単発、散漫に終わっており、日本列島ほど継続的に多量の鏡を使用し続けた地域はほかにありません。それほど鏡は日本列島住民の思想や心情にフィットしたといえます。

鏡の機能　大きく分けて３つの機能があります。１つめは実用的機能、２つめは呪術的機能、３つめは政治的機能です。中国での出現当初は呪術的機能が重要でしたが、広く一般への普及の契機となったのは、実用的機能の面によるものでした。日本の弥生時代、古墳時代には、実用的機能より呪術的、また権威の象徴として政治的機能が重視されました。日本では前方後円墳の終了とともに、銅鏡は一旦使用されなくなります。そして平安時代になって、姿見としての実用的機能のために再び製作、使用され始めます。平安時代以降は古墳時代のような政治的機能は喪失し、主に女性の持ち物となっていきますが、嫁入り道具の一部として貴族の女性のステータスシンボルとなったりしました。またまじないに使われたりと、「呪術」とは言わないまでも、その不思議な力の存在への意識は、現代にいたるまで続いています。

鏡の魔力　２つめの呪術的機能において鏡は、神の依り代（神社）、神器（三種の神器　八咫鏡）、形代などとなり、鏡がもつ「魔力」がまじないに使用されます。民俗例として、近代まで存在していた北東アジアのシャマン（薩満）の鏡の使用方法をみてみますと、シャマンは日頃から何枚もの銅鏡を身につけているほか、鏡をツールとして用いて病気や怪我を治したり、取り憑いた悪霊を追い出す、姿を暴く、身を守るなど辟邪の目的で使用したりしていました 。また現代においても鏡の「魔力」は忘れ去られたわけではなく、例えば鏡を覗いて女の子が変身するとか、人間に化けた魔物の姿を鏡に映して正体を暴くとかいった話は、洋の東西を問わず昔話やゲーム、アニメにも登場します。またおまじないに鏡が登場することも多く、鏡には不思議な力がある、ということは、現代の私たちにとってさえも、なんとなく感覚があることなのです。それが、見えない自然の力やまじないの存在が現代よりずっと大きかった古代において、より大きな影響力を持っていたことは想像に難くありません。

2. 古墳時代のまつり

古墳時代とは　およそ西暦３世紀中頃～６世紀、大きなマウンドをもつ墓（古墳）を造っていた時代を指します。弥生時代後期～古墳時代は、現在より気温が低い寒冷期にあり、人の移動、争い、神への祈りなどが多く起きた時期だともいわれています。水田稲作が広まり、首長と農民層により構成された集団が中小河川流域を領域として生活していました。農業は少人数ではできない、より大人数での協力が必要であり、首長居館と多数の農民集落を合わせた農耕共同体を形成していました。その農耕共同体の維持のためには、水の確保や水路設備の補修などが必要となってきます。その調整や祭祀をおこなう役割が必要となり、首長層が生まれ階層分化が進んだ、と考えられています。

古墳時代のまつり　首長などの権力者が、領土と人民を統括する「政」は神まつりに由来します。古墳時代は「まつりごと」が神まつりに裏打ちされた政事がおこなわれました。それは領域支配の主張・確認のためでもありました。。祭祀（神まつり）とは、神や精霊に対して、祈願したり慰めなだめたりするための儀礼行為です。その時の物的痕跡が祭祀遺跡（遺構）となります。神への供物の痕跡がとして残されているものに、銅鏡・武具・馬具・装身具・土器・形代（石製祭祀具・ミニチュア土器）などがあります。

古代日本における神さまのあり方　神には形がなく、この世に来るためには依り代（山・巨岩・峠・港湾・川・井泉など）に下りる、と観念されていました。山に神様が下りるという信仰は今でも全国に見られ、富士山信仰もその一つですし、神奈川でいえば大山信仰があります。またよくあるのが大きな岩への信仰で、例えば静岡県天白磐座遺跡では、大きな岩の路頭の周囲から、古墳時代の祭祀に用いられたミニチュア土器や玉類が出土しています。またしめ縄が張られており、現在でも信仰の対象となっています [図 2]。また、井戸やそこから水を引いた祭場などもまつられる対象となりました。『日本書記』や『古事記』の天照大神の岩戸隠れの話には、「榊に玉と鏡とニキテ（繊維・布）を懸けて祈った」とあり、榊に懸けられた玉と鏡は神との交信交感のための装置であったと考えられます。本物の鏡や玉のみならず、代用品として石製祭祀具（石製模造品）も使用されました。銅鏡の出土数自体は少ないですが、鏡形石製祭祀具も含めて考えると、その数はぐっと増えますので、祭祀全体を考えるには重要かもしれません。例えば、『日本書記』に日本武尊が山神の化けた白鹿に苦しめられた、とある美濃と信濃の境にある神坂峠では、鏡形を含む石製祭祀具が多く出土しています。古代人は峠や国境に荒ぶる神の存在をみたようです。

「ちはやぶる　神の御坂に幣奉り　齋ふいのちは母父がため」（万葉集）

図 2　静岡県天白磐座遺跡

これは奈良時代、防人となって東山道を異郷に向かう信濃国の人の歌です。異界に入る際、境界（この場合は坂）での通行儀礼として、幣を用いたまつりをおこなった様子が歌われています。

古墳時代の祭祀遺跡　鏡を使用した古墳時代祭祀遺跡の代表例として、福岡県沖ノ島（4世紀後半～）があります。三角縁神獣鏡をは

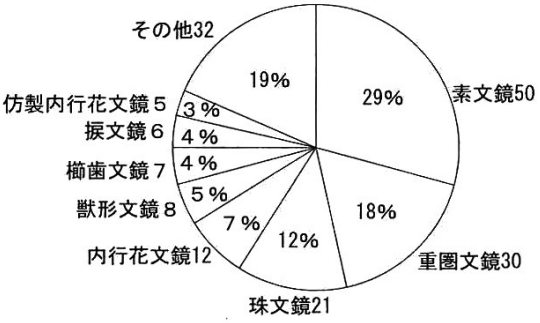
図 3　福岡県沖ノ島と出土石製祭祀具

じめとした豊富な出土品がそのまま遺り、時期毎の変遷がわかる好例で、大陸と海の道との境界でおこなわれた、ヤマト政権による国家的祭祀の跡だと考えられています　[図 3]。規模、継続期間、遺物の質・量全てが他の祭祀遺跡と比較して卓越しています。

3. ムラの鏡

非副葬鏡（ムラの鏡）　ここまで鏡そのものの性質をみてきましたが、いよいよここからはムラの鏡に焦点を当てていきたいと思います。まず一方の副葬鏡は、被葬者の政治的・宗教的権威を現世と来世に示すアイテムであり、遺体を護る神器であったと考えられます。いわゆる古墳時代の鏡というと、全国的にみればこちらが大多数であり、また三角縁神獣鏡をはじめとして、弥生時代、古墳時代を通した大きなテーマを語る際のキーとなる遺物です。そしてもう一方の非副葬鏡、つまり住居や水辺など生活関連遺構から出土する鏡は、数の少なさや内容のバラエティの多さもあって、研究の俎上に上がる機会はぐっと少なめです。副葬鏡との比率を具体的な数で示しますと、古墳時代の副葬鏡は 3,000 例を超えますが、非副葬鏡はその 8％前後しかありません（村松 2006）。また非副葬鏡の鏡式組成については、古墳副葬鏡の組成と重複しており非副葬鏡特有の鏡式があるというわけではありませんが、素文鏡、重圏文鏡、珠文鏡などの小型倭鏡が多く見られ、全体の約 60％を占めている点は、これも副葬鏡とは異なる傾向であるといえます [表 1]。また日本列島における非副葬鏡の面径をみてみると、ほとんどが径 15cm 以下の中・小型鏡であり [表 2] 、古墳副葬鏡には径 20cm を超える大型品が多数あることと比較すると、面径が小さめであることは非副葬鏡のひとつの特徴であるといえます。またその数は古墳時代前期に多いことが分かっています [図 4]。

表 1　非副葬鏡の鏡種（村松 2006 より）
※沖ノ島出土鏡を除く



神奈川の非副葬鏡　これらのことは神奈川県出土鏡においても、同様の傾向が確認できます [表 3]。非

表 2　日本列島における非副葬鏡の面径（村松 2006 より）

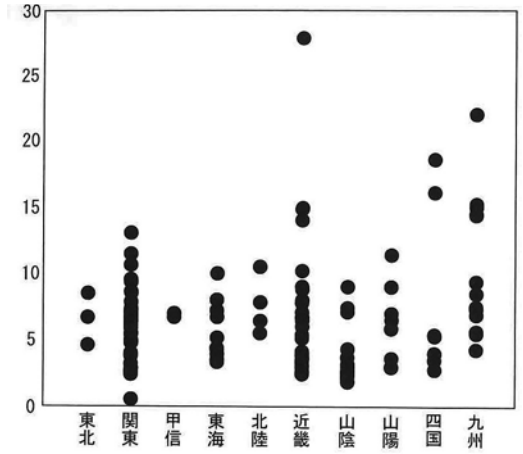
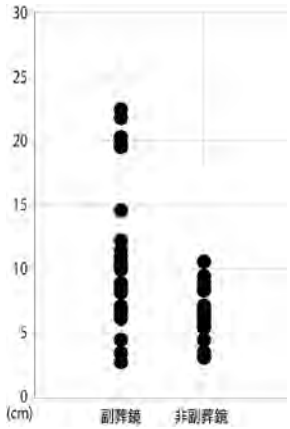


表 3　神奈川出土の副葬鏡・非副葬鏡面の面径比較



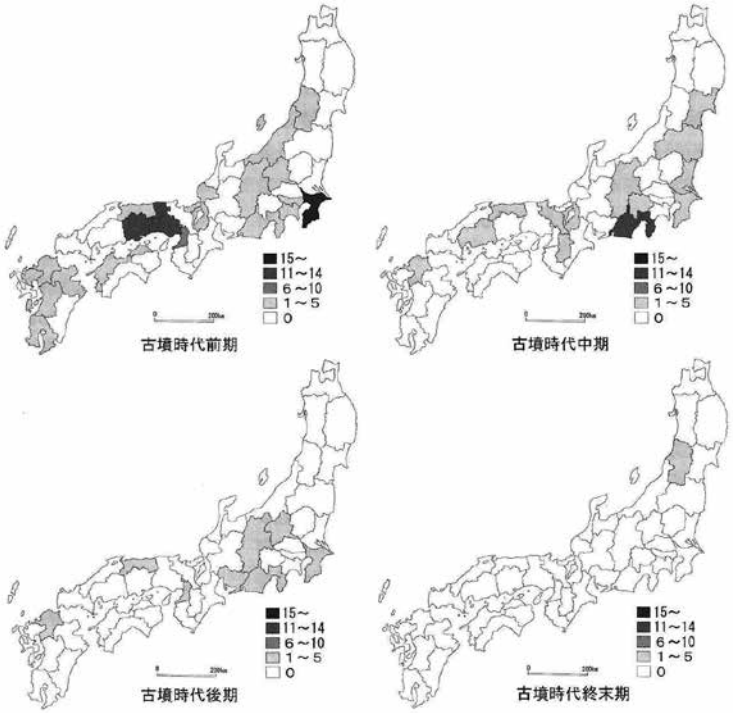


図４　古墳時代における非副葬鏡の分布（村松 2006 より）

副葬鏡には小形品や破鏡が多く、その機能を考えた時、姿見としての実用的機能や威信財としての政治的機能が占める割合は、低いのではないかと推測されます。とすると、残る呪術的機能に重点が置かれていたのではないでしょうか。神奈川の弥生・古墳時代出土鏡では、半数近くが非副葬鏡です [表４]　。同様の傾向は東京でも見られ、古墳時代前期の非副葬鏡の出土数が最も多いのは、南関東地方です。例えば奈良県では、古墳時代全般を通して副葬鏡は 300 面以上見つかっていますが、非副葬鏡は３面しかありません。

非副葬鏡の二種－水辺の鏡・住居の鏡－　非副葬鏡の出土場所を大きく分けると、水辺と住居（集落）の二種類になります。水辺で見つかる鏡は、神への奉納のために投げ込まれたと考えられています。その目的は、湧水点の近くであれば水の確保、交通上の要衝であれば水上交通の安全などを祈願したものと思われます。また集落やその住居内で見つかる鏡は、地霊の再生にかかわる呪術的宗教儀礼のため、あるいは集落の端であれば境界を護るために置かれたり埋納されたりしたと考えられます。

今回スポットを当てる鏡のうち戸田小柳遺跡出土鏡・高田南原出土鏡は水辺から、倉見川端遺跡出土鏡は住居から出土しています。それぞれの出土状況などの詳細や参考となる類例について、この後２本の事例報告でじっくり聞いていきたいと思います。そしてそののち座談会で、それぞれどのように使われ、そこで埋没することとなったのか、鏡の性質や事例を参考としながら、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

図表出典

図 1：中国社会科学院考古学研究所編著 1980『殷墟婦好墓』中国田野考古報告集考古学専刊丁種第二十三号，文物出版社；786　図２・３：大阪府立近つ飛鳥博物館 2012　図４：村松 2006

表１・２：村松 2006　表３・４：発表者作成

参考文献

新井悟 2018『古鏡のひみつ「鏡の裏の世界」を探る』河出書房新社

大阪府立近つ飛鳥博物館 2012『王と首長の神まつり－古墳時代の祭祀と信仰－』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 57

岡村秀典 2017『鏡が語る古代史』岩波新書（新赤版）1664、岩波書店

中村潤子 1999『鏡の力　鏡の思い』大巧社

村松洋介 2006「古墳時代の祭祀遺物」『季刊考古学』第 96 号　雄山閣 pp.40-43

表 4　神奈川県出土の弥生古墳時代鏡一覧

	時期		舶倭	資料名	市町村	遺跡名	遺構		遺構時期	製作時期	面径
副葬	前期	1	倭	素文鏡	平塚市	万田熊之台遺跡方形周溝墓南溝	方形周溝墓	周溝	古墳前期	古墳	3.3
		2	倭	珠文鏡	川崎市	白山古墳後円部北粘土槨	古墳	主体部	古墳前期	古墳前期	6.5
		3	倭	捩文鏡	川崎市	白山古墳後円部北粘土槨	古墳	主体部	古墳前期	古墳前期(中期)	6.5
		4	倭	櫛歯文鏡	川崎市	白山古墳前方部粘土槨	古墳	主体部	古墳前期	古墳前期	4.4
		5	舶	三角縁天王日月獣文帯四神四獣鏡	川崎市	白山古墳後円部木炭槨	古墳	主体部	古墳前期	魏	22.4
		6	倭	連弧文鏡	川崎市	白山古墳後円部木炭槨	古墳	主体部	古墳前期	後漢	10.3
		7	舶	三角縁陳是作四神二獣鏡	平塚市	真土大塚山古墳　中央主体部	古墳	主体部	古墳前期	魏	22.1
		8	倭	四獣形文鏡	平塚市	真土大塚山古墳	古墳	主体部	古墳前期	古墳前期(中期)	7.8
		9	舶	飛禽鏡	厚木市	伝　稲荷山第1号古墳	古墳		古墳前期	後漢	6
		10	舶	内行花文鏡	横浜市	観音松古墳粘土槨	古墳	主体部	古墳前期	後漢	19.5
		11	倭	四神像鏡	横浜市	カネ塚（吉田古墳）	古墳	主体部	古墳前期(中期)	古墳	12.6
	中期	12	倭	ダ龍鏡	横浜市	日吉矢上古墳	古墳	主体部	古墳中期	古墳中期	20.6
		13	倭	ダ龍鏡	横浜市	日吉矢上古墳	古墳	主体部	古墳中期	古墳中期	20.6
		14	倭	四獣形文鏡	厚木市	吾妻坂古墳第5主体部	古墳	主体部	古墳中期	古墳中期	19.5
		15	倭	二神二獣鏡	厚木市	岡津古久古墳　第1号木棺直葬墓	古墳	主体部	古墳中期	古墳中期～	11.05
	後／終末期	16	倭	乳文鏡	伊勢原市	埒免古墳	古墳	主体部	古墳後期	古墳後期	9
		17	倭	五獣形文鏡	伊勢原市	登尾山古墳	古墳	主体部	古墳後期	古墳中期	10.6
		18	倭	珠文鏡	横須賀市	鳥ヶ崎横穴群鳥ヶ崎洞穴	古墳	主体部	古墳	古墳	3.8
		19	倭	乳脚文鏡	大磯町	下田横穴墓群第5号穴	横穴墓	主体部	古墳終末	古墳後期	8.4
	不明　詳細時期	20	舶	斜縁神獣鏡	川崎市	了源寺山古墳（加瀬山4号墳）	古墳	主体部	古墳	後漢	14.8
		21	舶	盤龍鏡	川崎市	了源寺山古墳（加瀬山4号墳）	古墳	主体部	古墳	後漢	10.3
		22	倭	七弧内行花文鏡	高座郡寒川町	大神塚古墳　主体部	古墳	主体部	古墳	古墳前期(中期)	10
		23	倭	重圏文鏡	横浜市	軽井沢横穴（西軽井沢横穴）	横穴墓	主体部	古墳	古墳	9
非副葬	集落（住居）	24	倭	弥生時代小形倣製鏡	横浜市	大場第二地区遺跡群No.2地区YT-10住居跡	集落	住居	弥生後期	弥生後期	5.7
		25	倭	重圏文鏡	横浜市	梶山遺跡第Ⅱトレンチ	集落	表土	古墳	古墳前期	5.6
		26	倭	内行花文鏡	逗子市	池子遺跡群No.2地点第2号住居跡	集落	住居覆土	古墳前期	古墳	9.4
		27	倭	珠文鏡	逗子市	池子遺跡群No.1-C地点F-VIII-61グリッド	集落	包含層	古墳	古墳	6.2
		28	倭	捩文鏡	藤沢市	大源太遺跡第3低地Ⅲ層遺物包含層	集落	包含層	奈良・平安	古墳前期(中期)	6.6
		29	倭	弥生時代小形倣製鏡	平塚市	真田・北金目遺跡群44区SI0159	集落	住居	弥生後期後半	弥生終末	7
		30	倭	連弧文鏡	平塚市	真田・北金目遺跡群44区遺構外	集落	遺構外	弥生後期～古墳前	古墳	13
		31	倭	珠文鏡	高座郡寒川町	倉見川端遺跡P92地区1号住居跡	集落	住居	古墳	古墳前期	6.8
		32	倭	重圏文鏡	伊勢原市	成瀬第二地区遺跡群下糟屋C地区第2地点102号住居跡	集落	住居覆土(試掘時)	古墳前期	古墳前期	3.7
		33	倭	重圏文鏡	小田原市	永塚下り畑遺跡第Ⅳ地点K6号住居跡	集落	住居覆土	古墳前期	古墳前期	7.8
		34	倭	分離式神獣鏡系	小田原市	別堀前田遺跡第Ⅰ地点	集落	溝	古墳	古墳前期(新?)	10.4
		35	倭	櫛歯文鏡？	小田原市	千代北町遺跡第Ⅹ地点1号竪穴住居	集落	住居	古墳前期	古墳	破片
	水辺	36	倭	珠文鏡	相模原市	勝坂有鹿谷祭祀遺跡	水辺	祭祀遺構	古墳前期末~後	古墳前期	6.6
		37	倭	珠文鏡	相模原市	勝坂有鹿谷祭祀遺跡	水辺	祭祀遺構	古墳前期末~後	古墳前期	5.5
		38	倭	珠文鏡	相模原市	勝坂有鹿谷祭祀遺跡	水辺	祭祀遺構	古墳前期末~後	古墳前期	5.5
		39	倭	珠文鏡	相模原市	勝坂有鹿谷祭祀遺跡	水辺	祭祀遺構	古墳前期末~後	古墳前期	4.7
		40	倭	櫛歯文鏡	相模原市	勝坂有鹿谷祭祀遺跡	水辺	祭祀遺構	古墳前期末~後	古墳	3.55
		41	倭	六獣形文鏡	相模原市	勝坂有鹿谷祭祀遺跡	水辺	祭祀遺構	古墳前期末~後	古墳前期(新?)	7.0
		42	倭	珠文鏡	相模原市	勝坂有鹿谷祭祀遺跡	水辺	祭祀遺構	古墳前期末~後	古墳前期	4.5
		43	倭	珠文鏡	小田原市	高田南原遺跡第Ⅱ区H-8グリッド	水辺	包含層	古墳	古墳前期	8.1
		44	舶	双頭龍文鏡	厚木市	戸田小柳遺跡P2地区H20号流路	水辺	旧流路	古墳後期	三国	9.0
不明その他		45	倭	重圏文鏡	川崎市	宮前小台遺跡	不明	不明		古墳前期(中期?)	不明
		46	?	不明	横浜市	虚空蔵山遺跡E-V区表土	集落	包含層	不明	不明	7
		47	倭	珠文鏡	横須賀市	伝　横須賀市	不明	不明	不明	古墳前期	7.2
		48	?	不明	横須賀市	鳥ヶ先横穴群鳥ヶ崎B横穴	横穴墓	主体部	古墳終末	古墳	7.1
		49	倭	六獣鏡	平塚市	北金目	不明	不明	不明	古墳後期	完形
		50	倭	不明	厚木市	戸室天神山古墳	古墳	表採	古墳	古墳	8.8
		51	和	（和鏡）	伊勢原市	伝　黄金塚古墳	古墳	主体部	古墳前期		不明
		52	倭	不明	伊勢原市	伝　伊勢原市	横穴？		古墳		12.3
		53	?	不明	二宮町	伝　中里横穴	横穴墓		古墳終末	古墳	不明
		54	舶	連弧文鏡	不明	伝　神奈川県	不明	不明	不明	不明	12.3
		55	舶	双頭龍文鏡	不明	伝　神奈川県	不明	不明	不明	不明	4.7